主日礼拝説教「あなたは本当に自由か？」予稿

日本基督教団石神井教会　2024年1月28日

【使徒書日課】ヨハネの手紙二

1長老のわたしから、選ばれた婦人とその子たちへ。わたしは、あなたがたを
真に愛しています。わたしばかりでなく、真理を知っている人はすべて、あなた
がたを愛しています。2それは、いつもわたしたちの内にある真理によることで、
真理は永遠にわたしたちと共にあります。3父である神と、その父の御子イエス・
キリストからの恵みと憐れみと平和は、真理と愛のうちにわたしたちと共にあり
ます。

4あなたの子供たちの中に、わたしたちが御父から受けた掟どおりに、真理に
歩んでいる人がいるのを知って、大変うれしく思いました。5さて、婦人よ、あ
なたにお願いしたいことがあります。わたしが書くのは新しい掟ではなく、初め
からわたしたちが持っていた掟、つまり互いに愛し合うということです。6愛と
は、御父の掟に従って歩むことであり、この掟とは、あなたがたが初めから聞い
ていたように、愛に歩むことです。7このように書くのは、人を惑わす者が大勢
世に出て来たからです。彼らは、イエス・キリストが肉となって来られたことを
公に言い表そうとしません。こういう者は人を惑わす者、反キリストです。8気
をつけて、わたしたちが努力して得たものを失うことなく、豊かな報いを受ける
ようにしなさい。9だれであろうと、キリストの教えを越えて、これにとどまら
ない者は、神に結ばれていません。その教えにとどまっている人にこそ、御父も
御子もおられます。10この教えを携えずにあなたがたのところに来る者は、家に
入れてはなりません。挨拶してもなりません。11そのような者に挨拶する人は、
その悪い行いに加わるのです。

12あなたがたに書くことはまだいろいろありますが、紙とインクで書こうとは
思いません。わたしたちの喜びが満ちあふれるように、あなたがたのところに行
って親しく話し合いたいものです。13あなたの姉妹、選ばれた婦人の子供たちが、
あなたによろしくと言っています。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　8章21～36節

21そこで、イエスはまた言われた。「わたしは去って行く。あなたたちはわた
しを捜すだろう。だが、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。わたし
の行く所に、あなたたちは来ることができない。」22ユダヤ人たちが、「『わた
しの行く所に、あなたたちは来ることができない』と言っているが、自殺でもす
るつもりなのだろうか」と話していると、23イエスは彼らに言われた。「あなた
たちは下のものに属しているが、わたしは上のものに属している。あなたたちは
この世に属しているが、わたしはこの世に属していない。24だから、あなたたち
は自分の罪のうちに死ぬことになると、わたしは言ったのである。『わたしはあ
る』ということを信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことにな
る。」25彼らが、「あなたは、いったい、どなたですか」と言うと、イエスは言
われた。「それは初めから話しているではないか。26あなたたちについては、言
うべきこと、裁くべきことがたくさんある。しかし、わたしをお遣わしになった

方は真実であり、わたしはその方から聞いたことを、世に向かって話している。」
27彼らは、イエスが御父について話しておられることを悟らなかった。28そこで、
イエスは言われた。「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしは
ある』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えら
れたとおりに話していることが分かるだろう。29わたしをお遣わしになった方は、
わたしと共にいてくださる。わたしをひとりにしてはおかれない。わたしは、い
つもこの方の御心に適うことを行うからである。」30これらのことを語られたと
き、多くの人々がイエスを信じた。

31イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとど
まるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。32あなたたちは真理を知
り、真理はあなたたちを自由にする。」33すると、彼らは言った。「わたしたち
はアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。『あ
なたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」34イエスはお答えにな
った。「はっきり言っておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。35奴隷は
家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。36だから、もし
子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。

「わたしはある」【こども説教のために】

『こどもさんびか改訂版』に、16 番「イエスさまいるってほんとかな」という讃美歌があります。*1 節「イエスさまいるってほんとかな、今でもいるって言うけれど。イエスさまいるってほんとかな、見たことないけれど」。*

日曜日の礼拝で、わたしたちは、「ここに集められた者の間に、主イエスがいらっしゃる」と言います。『聖書』の御言葉を共に聞き、「パンと杯」を分かち合う食卓＝聖餐卓を囲む者たちの中に、主イエスはいつもいてくださる、とわたしたちは信じているのです。

けれども、それが分からない、と言う人もいるでしょう。本当だろうか、と疑う人もいるでしょう。当然です、見える姿で主イエスがいらっしゃるわけではないからです。せめて主イエスの写真か肖像でもあれば、もう少し分かってもらえるのかもしれませんが、それもないのですから。

主イエスは、神の御子としてお生まれになりましたが、不死身の超人として生き続けているわけではありません。弟子たちと共に旅をされましたが、彼らの前からも去って行かれたのです、十字架につけられて。それでも、弟子たちは、主イエスが永遠に共にいてくださると信じて歩みました。主イエスが、「**わたしはある**」といつもおっしゃられていたからです。

「わたしは存在する」とおっしゃられていたのです。主イエスを直接知らない弟子たちも、「わたしはいる」とおっしゃられた主イエスが、今ここに共にいてくださることを信じました。わたしたちも、信じているのです、自分が存在していることを信じているように、主イエスがいらっしゃることを。

自由になる

石神井教会では、8 年前の 4 月にわたしどもが着任してから、主日礼拝では日本基督教団の定める主日聖書日課に従って、聖書朗読を聞いてきました。伝統的な 3 年周期の主日聖書日課を改めて 4 年周期に編成しなおしたものです。この 4 年周期の主日聖書日課は、わたしが神学校を卒業して教会にお仕えするようになった 2000 年の秋から用いられるようになりました。今は、6 回目の周期の最後の一年に当たります。

この主日聖書日課に従って礼拝を重ねてきて、気づかされたことがあります。同じ聖書の御言葉を繰り返し聞くという歩みを通して、御言葉が過去の経験と結びついて想起されるようになってきたのです。個人的な経験だけでなく、教会として皆さんと共に経験した過去の出来事が、4 年後に、8 年後に同じ御言葉が開かれることを通して、想起されるのです。

4 年前、わたしたちは、今、毎週の主日礼拝で聞いている聖書の御言葉を聞き続けていました。突如として始まった感染症の世界的な騒ぎの中で、すべての行動が制限され、営みの自粛がされていった 4 年前です。政府が緊急事態を制限したのは、受難節に入るタイミングでした。自粛の受難節を過ごし、復活祭にはとうとう、礼拝を含めて集まることを取りやめたのです。多くの教会が、イースターの祝いに集まることを断念しました。

今日の主日聖書日課は、4 年前、あのような制限、自粛が叫ばれるようになる直前に、主日礼拝で聞いていた御言葉です。「**真理はあなたたちを自由にする**」、「**もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる**」。そのように主イエスがおっしゃられた言葉を、わたしは、ある意味でとても無邪気に聞いて、説教者として語っていたことを思い出します。わたしたちも、主イエスの発言に反発したユダヤ人たちのように、「わたしたちは、信仰者です。今までだれかの奴隷になったことはありません」と本音では考えながら、わたしは皆さんに、「わたしたちは、もっと自由になる」と、少し浮ついたようなことをお話ししたのです。まもなく、すべてが不自由で制限された、奴隷のような生活に縛られるようになるとも知らずに。

本当に良かったのだろうかと、わたしは考えずにいられません。殊に、将来を見据えて大切な時期を歩んでいたであろう若者たちが、人との出会いを奪われ、失敗を恐れずに挑戦する機会を奪われ、多くの可能性を奪われたのです。そのような社会情勢に抗って、教会は、彼らのために何かすることができただろうか。ほとんど何もできなかったのではないか。世界中の教会が、です。一度手放した自由を取り戻すことは、容易ではありません。一度制限し縮小したものを元どおりにするには、最初の何倍もの熱意と労力が必要なのです。それを、教会は、まだできていないと言わざるを得ない。

真理を知る

福音書の伝える主イエスの言動に触れると、ときに、その激しさに戸惑わされます。論争を仕掛けてくる人々に対して、容赦なく論破されることもあれば、御自分を信じるようになった者たちに対して、敢えて突き放すようなことをおっしゃられて離反を招いたりなさっているのです。何が、それほどまでに主イエスを突き動かしていたのか、不思議になるほどです。これが、「**互いに愛し合いなさい**」と教えられた方の姿なのか。「**敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい**」（マタイ 5:44）と命じられた方の振る舞われ方なのか。そう思わされるのではないでしょうか。

もちろん、主イエスの激しさに共感する人もいるかもしれません。「主イエスこそ、真理を語り、真理に基づいて行動された方なのだ。われわれも、主イエスに倣って真理を知り、強く、激しく、真理を知らぬ過てる世の人々に対峙していくべきだ」と。「真理はあなたたちを自由にする」という御言葉が、大学や図書館の入口に掲げられてきたのは、まさに、そのような考えに基づいてのことでしょう。学問の説く真理によって、無知蒙昧な世の人々を啓蒙する、と。けれども、主イエスの激しさとは、そのようなものだったのでしょうか。わたしには、そうは思えません。

「ヨハネの手紙二」を記した「長老のわたし」は、「真理」という言葉を繰り返すことで、この手紙を始めています。「**あなたがたを真に愛しています**」、「**真理を知っている人はすべて**」、「**いつもわたしたちの内にある真理によること**」、「**恵みと憐れみと平和は、真理と愛の内にわたしたちと共に**」、「**真理に歩んでいる人がいるのを知って**」。わたしたちの日本語訳「聖書」は、最初だけこの語を「真」と訳しています。「真理（アレテェイア）」は、「真＝まこと」なのです。嘘偽りのない真心のことです。もちろん、この長老は、主イエスの教えを知っていたはずです。主イエスがお語りになられた「真理」ということについても、聞いていたのでしょう。その長老が言っているのです。主イエスが言われた「真理」とは、必ずしも客観的な真実を指して「真理」と言われているわけではない、と。

「**あなたたちは真理を知**」るとおっしゃられたとき、主イエスは、御自分が去って行かれることをお語りになられていたのです。十字架に向かって行かれていること、「わたしは命を捨てる」（ヨハネ 10:18）ということを。「わたしは、まことをもって、命がけであなたがたを愛する」。それが、主イエスの激しくも人々に向かう姿勢だったのではないでしょうか。

「**あなたがたを真に愛しています**」。主イエスの真理を知る者にとって、それは、綺麗ごとではありません。命がけで、熱意を注ぎ、まことをもって愛するのです。そのとき、わたしたちは、本当に自由にされるでしょう。